

平成 25 年度 第 1 回京都市環境審議会
会議録

日 時 平成 25 年 7 月 19 日（金）午前 10 時～11 時 40 分

場 所 ホテル本能寺 5 階 醍醐ホール

出席者 浅岡委員，池垣委員，石野委員，板倉委員，大里委員，小幡委員，笠原委員，菊池委員，北村委員，小山委員，島田委員，外池氏（奥原委員代理），内藤委員，長畑委員，濱崎委員，深尾委員，牧野委員，村瀬委員，諸富委員，山内委員，山口委員，山舗委員，湯本委員

欠席者 青野委員，内田委員，大久保委員，木崎委員，小杉委員，在間委員，塩路委員，杵本委員，仁連委員，藤村委員

内 容

1 開会

- ・環境政策局長 挨拶

2 議題

（1）会長の互選

- ・会長に内藤委員が就任

（2）会長職務代理者の指名

- ・会長代理に笠原委員が就任

（3）部会設置等

- ・昨年度に引き続き，京の環境共生推進計画評価検討部会，地球温暖化対策推進委員会，生物多様性保全検討部会を設置
- ・今年度新たに環境保全基準部会を設置
- ・各部会の構成員を決定
- ・京の環境共生推進計画評価検討部会部会長に小幡委員，地球温暖化対策推進委員会委員長に仁連委員，生物多様性保全検討部会部会長に湯本委員，環境保全基準部会部会長に笠原委員がそれぞれ就任

（4）各部会の審議状況等について

- ・事務局から京都市地球温暖化対策計画の見直しについて資料 3 を用いて説明
- ・事務局から生物多様性保全検討部会の審議状況について資料 4 を用いて説明

(浅岡委員) 仁連委員が欠席につき私が補足させてもらう。委員会では前向きな議論が行われている。京都府市は国の原発を推進してきたエネルギー政策に基づき、電気の排出係数の低下を見込んで温室効果ガス排出削減目標を設定しているが、この点が問題になっている。京都市民の意識にも大きな変化があり、また、LED など関連する製品等についても、取りまく環境に変化があると思われることから、今のタイミングを市として前向きに捉え、東日本大震災以前の対策を見直し、削減を強化し実施していくべきであると議論している。

(内藤会長) それでは、温暖化対策計画の見直しの話に絞って議論をお願いしたい。

(石野委員) 温暖化対策について、府と市は共同で条例を作り目標等を設定した経過があるので、府としても現在見直しを検討中である。府も 25%削減という目標は堅持していくことを考えているが、ではどうやって実現するのか。府の CO2 排出量は、全体の 4 割が電気によるものであり、これを化石燃料で作っては節電してもカバーできない。このため、これからは、再生可能エネルギー導入や省エネの普及、またエネルギーマネジメントやデマンド・レスポンスなどの仕組みを社会にどうやって定着させるか、道筋を考えるべきと検討している。

(内藤会長) 滋賀県でも節電を進めており、ハードを活用して市民生活に切り込むことを進めたが、各家庭での取組では限界があった。そこで、設備ではなく地域のコミュニティを利用し、みんなで寄り合うことで医療・福祉の副次的効果として節電ができないかと動いている。池垣委員は、家庭での節電について何か意見はあるか。

(池垣委員) 以前、関西電力の主婦の方が様々な節電・節水の方法や計算を勉強しているという話を聞き、自分自身節電について無関心なことに気付いた。このため、私も勉強し工夫をした結果、先月は 4.7%の節電ができた。やはり皆が一箇所に集まり、クールシェアすることが効果的だと実感した。

(山口委員) 私は、子供の頃から両親の考えで節約して生活していたので、物を大切にしている習慣が定着しており、また、様々な情報から、これだと思う節電を探している。先ほどクールシェアの話が出たが、私自身の家庭でも寝室でのエアコンの使い方を工夫し、使用台数を 2 台から 1 台に減らすことができた。また、京都市では一人暮らしの老人が家で一日中エアコンを入れていることも多いと思うので、カフェなど老人が集まれる場所があれば、認知症予防や節電につながると思う。

(内藤会長) 最後のお話については、大々的に仕掛け、まちなかに多くある空き家などを上手に利用すれば、福祉や医療、教育などの様々な副次効果やそれによる予算の削減などにつながるのではないか。

(諸富委員) 大飯原発が動いていないため、電力を火力に頼ることで節電努力をしても電力削減効果が原発の停止の効果に打ち消され、計算上 CO2 排出量が増える矛盾がある。そのため、電気やガスを節約したときの適切な指標を示す必要がある。全てを CO2 化して評価することが望ましいとは限らず、努力した成果を適切に評価でき

るようにするべき。そして、震災以降の節電、省エネ、再生可能エネルギー、蓄電などの動きをもっと伸ばし、ビジネス化していくべき。現状、エネルギー管理は家庭やビル単位だが、今後、国の電力システム改革が進んでいくことから、市・府が取り組む場合は地域コミュニティなどエリアを広げ、合理的集散的に管理していくのがよい。また、今後、スマートメーターが普及すると、電気の使用情報を誰が管理していくかが課題となるが、社会全体で課題を共有し、合理的に節電情報基盤として使えれば理想である。

(内藤会長) 電力会社が情報を独占する立場にあることは今回の原発事故で明らかになっており、原発に関するコスト自体、LCAとして推計すると本当にあんなものだったのかと疑問視されている。同様に電力会社が算定している排出原単位についても、疑問がありそうだが大きな議論になっていない。実態はデータが開示されないため分からないが、今後追求する必要があると思う。

(小幡委員) 今回の資料だが、書き方の問題だとは思うが、国の計画、目標などを踏まえてという文章の書き方について、独自性を考慮して表現を見直してはどうか。昔は滋賀県の環境行政が環境庁などの見本となっていた。国から下ろしてくるのではなく、地方から上げていく気持ちで前向きに取り組むべきでは。

(馬屋原地球温暖化対策室長) まさに御指摘のとおりである。国は、温暖化対策計画、エネルギー基本計画について原発の状況を踏まえてゼロベースで見直すとしており、COP19までにどれくらいの目標を掲げるか不透明である。京都市としては、国の動向にかかわらず、需要サイドも含めて対策を強化していくことに変わりはないので、表現を見直したい。

(内藤会長) 滋賀県は環境対策において日本のトップを行かなければいけないと考えている。50%削減の数字を最初に出したのも滋賀県であり、京都市もそれを上回るように頑張ってもらいたい。

(浅岡委員) 部会でも、府、市共にこれまでに考えていた基本的な方針や目標を国のように御破算にすることは考えていないとしていた。消費量は1割下がっているが、排出係数が少し増えていくことは仕方がない、将来的には排出量を減らすことが目標であり、それに係る指標を加えることもあると考えている。

(内藤会長) どこを狙うか、どこに力を入れていくかが課題である。

(諸富委員) 見直しは何年先になるのか。

(馬屋原室長) 現計画の目標は2020年になっている。

(諸富委員) 今後、電力小売の自由化が進むことで電力供給会社の選択や、様々な電力料金メニュー、サービスが出てくると考えられ、それらはスマートメーターの情報を活用していかなければ無理である。また、現在、けいはんなで実証実験が行われているが、今後は、家単位、ビル単位などの消費サイドでの個別取組で終わるのではなく、エリアでの取組が進んでいくと考えられる。2020年には、電力システム開

- 発もほぼ完了しているので、そういった所も考慮しながら考えていく必要がある。
- (馬屋原室長) これからは電力システムも大幅に変わっていくと思うが、岡崎地域でも電力の部分最適化の実証実験を行っており、将来的に電力システムの改革の流れの中で最終的にはスマートシティということも考えている。条例にも書かれているが、その時期その時期で計画内容については柔軟に見直したいと考えている。
- (内藤会長) 学校における省エネや環境教育の取組はどうか。
- (深尾委員) 4年生が環境の勉強をしており、外部に情報発信している。また、節電、節水については学校全体で取り組んでいる。芝生やビオトープなどを通じて自然のすばらしさを味わわせてあげたい、環境を考える子供になってほしいと思っている。
- (内藤会長) 生物の話振っていただいたところなので、湯本委員から生物多様性の話をお聴きしたい。
- (湯本委員) 生物多様性の問題は、温暖化問題などに比べて後回しになりがちである。私は、それを生物学者が希少種の保全など狭い意味での自然保護の話を使いすぎたため、市民や事業者が遠ざかったからと考えている。生物多様性地域戦略は、自治体が生物多様性基本法に基づいて策定するものであり、希少種を守るだけでなく、当たり前前の自然を守ることを考えるものである。また、京都市は観光都市であり、山紫水明や三山の自然といった自然の恵みから恩恵を受けている部分が多く、この地域戦略はそれを発展させるものである。先祖代々受け継いできた自然を今私たちが食いつぶしているかもしれない。次の世代に引き継ぐため、当たり前前の自然を守ることが戦略の骨子となっている。そして、当たり前前の自然とおかしい自然をどう認識するかも重要なことであり、そうした感覚を身に付け、市民のリテラシーを高めることも必要である。また、企業活動の中で生物多様性に配慮したガイドラインを作成してもらい、その中に京都らしさを入れることができればよい。戦略の中には、先進的な企業の取組など補足資料を充実させ、計画の抽象性を補っていきたいと考えている。
- (内藤会長) 京都独自のセンスとして、伝統文化の視点で京都の自然をどう再生していくかという議論はあるのか。
- (濱崎委員) 花や着物にしても材料が手に入らなくなっており、職人が減っているということ以前に、伝統文化を守るのに大切なのは農業だと話している。最近、足元を見直すということから伝統文化に関心を持つ人が増えてきているが、伝統文化と農業などのつながりも見直していくことができないかと考えている。また、環境に関心がある人、文化に関心がある人は、それぞれがつながっているとは考えておらず、お互いと一緒に考えることが大切である。留学生とお茶会を行う際、いつも電気を消して本来の光の中で味わってもらうようにすることで、文化の仕掛けで今まで気付かなかったものを感じてもらおうようにしている。このように文化の力で“電気を消してもかっこいいな”という動きが広がればよいと考えている。また、元々

の美意識や世代によって捉え方に違いがあり、今の方々はかえって暗い方が良いと考える人が多くなっている。

(内藤会長) 近代の象徴的なコンクリートの建物である京都駅ビルの中で生物多様性を現すにはどうすればよいかという議論にも参画している。観光客が京都駅に降りたときに京都らしいと感じる生物多様性とはどういうものか。

(村瀬委員) 京都駅を降りるとすぐに山が見える。東京駅などほかでは考えられない点であり、京都独特の雰囲気である。

(内藤会長) ただ、京都はまちの周辺に山があり緑が多いのがあだとなっており、まちなかに緑がない。六大都市で最も少ないのではないか。

(村瀬委員) 街路樹の植樹を推進すると聞いている。

(内藤会長) 京都市は今街路樹の整備を進めているので、将来的には京都駅まで緑の回廊が繋がるとよい。

(濱崎委員) 街路樹も大切だが、庭をもっと大切にしてほしい。

(内藤会長) 空き家になると直ぐに潰してミニ駐車場となってしまう。

(笠原委員) 生物多様性の話ではないが、温暖化の話で二、三十年後という話が出た。

行政サイドは短期的な視点でのエネルギーの方針を考えているが、一方、持続的発展が可能な社会、すなわち将来世代の人たちが現在と同様な環境の恵沢を享受できるような社会を構築するためにはどうすればよいか、長期的な視点も重要である。2100年には労働人口が1/4に減少している中で、どういう環境・社会が維持されているかを考えることも重要である。

(内藤会長) 基本的に人口フレームが変わる訳であるから、今後温暖化、生物多様性を含めて、そのような視点で再検討する必要があるだろう。

3 閉会

・地球環境・エネルギー政策監 挨拶

・閉会